

令和6年度全国学力・学習状況調査結果について

白馬村教育委員会

令和6年4月18日に実施された「全国学力・学習状況調査」について、今後の教育活動に役立てるため、本村の結果を分析しました。その概要をお知らせします。本調査での測定は学力の一部であり、学校教育活動の一側面です。

1 調査の概要

・調査内容

(ア)対象学年 小学校6学年 中学校3学年

(イ)教科に関する調査(小学校調査は、国語・算数 中学校調査は、国語・数学)

(ウ)教科学習に対する興味・関心、規範意識・自己有用感、生活習慣・学習習慣に関する調査

2 調査結果の概要

(1)教科に関する調査結果の概要

【小学校】

	全国平均正答率	長野県	白馬村	全国平均に比較して
国語	67.7%	67%	66%	同程度
算数	63.4%	62%	63%	同程度

【中学校】

	全国平均正答率	長野県	白馬村	全国平均に比較して
国語	58.1%	58%	59%	同程度
数学	52.5%	51%	52%	同程度

※中学校の全国、長野県は公立学校のための集計

(2)教科に関する調査結果からの考察 ※ ○→成果や傾向 △→課題

【小学校】

① 国語科

- 知識・技能より、思考・判断・表現の力がついてきている。
特に、思考・判断・表現の「読むこと」の問題は、概ね解けている様子がある。低学年ころから、毎日のように図書館へ通っていることも力につながっているのではないか。(南小)
- 「読むこと」の物語文を読み取る力は、上記の理由に加え、意図的に長文読解の時間をくり返し設けた成果でもあると考えられる。(南小)
- 選択問題は、正答率が県、全国に比べて高い傾向にある。心に残ったところと理由を記述する問題でも全国、県平均を超えた。「記述だから書きにくい」「記述に苦手感がある」ということはなさそうである(北小)。
- 読書については、興味が高い子どもたちが多く。また、児童質問を見ると、新聞を読んでいる子どもたちの割合も全国、県と比べると非常に多い割合となっている。読解力との因果関係を見極めていきたい。(北小)
- △ ダブルの子どもの中には、日常会話で思いを伝えづらかったり、国語の学習となると苦手になったりする様子が見られる。早い段階から、個別の日本語指導が必要ではないかと思われる(南小)。
- △ 2三ア「きょうぎ」の記述の正答率は2割、無回答が4割。2三イ「投げる」の記述の正答率は、8割。日常から使う言葉や漢字は書けるが、日常会話の中であまり使わないような言葉になると記述できない子が多くなる。(南小)。
- △ 情報と情報との関連付けの仕方、図などによる語句と語句の関係の表し方を理解する点においては全国、県平均を5ポイント以上下回った。マインドマップなど思考ツールを用いて、思考を可視化する学習を進めていく必要がある。(北小)
- △ 同音以後の漢字の記述は正答率が高かったが、送り仮名を必要とする漢字については、10ポイント以上正答率が低かった。「投げる」は小学校3年生で習う漢字である。日常から漢字を使う必要感を高めていく必要があるだろう。(北小)

～今後の対策～

- 漢字の読み書きについては、個人差がとても大きい。日常生活の中で、語彙を広げられるような工夫も必要。また、漢検受検をすることも考えているので、そこに向けて力を付けていきたい。(南小)
- 一人一人が、自分の考えを持ち、言葉にしたり書いたりして、相手に伝えるような学習活動をどの教科でも継続していくことが大事だと考える(南小)。
- 小学校では特に、マインドマップ等に自分の考えを書くという方法を取り入れている。タブレットなどに、自分が思ったことをどんどん書き込んでいくことが、思考を深めていくことにつながるように感じる(南小)。
- 国語科の力は、国語の授業だけでつくものではなく、様々な教科や生活全体の中で付くものだと考える。児童全員が自分の考えを持つ→相手に伝える→自分で再考する、という思考のスパイラルを教育活動全ての中で今後も意識していきたい(南小)。
- ダブルの子どもたちが今後も増えていくことが予想されるため、日本語指導員が南小にも来ていただき、サポートしていく体制を再度お願いしたい。(南小)
- 全国正答率より5ポイント以上高い問題が5問、5ポイント以上低い問題が5問。出来不出来が明確となる結果となった。苦手なところを補っていくことで、今後、学習の理解はより深まるのだろうと考えられる。(北小)
- 今年度は、無回答率が全国や県平均よりも大きく上まわった。最後まで諦めず課題を追求すること

が日常の授業の中でできるよう、授業の質を高める努力をしたい。(北小)

② 算数科

- 選択式・短答式・記述式いずれも、解答しようとする意欲は見られた(南小)。
- 授業中、わからない部分を □ を使って式を作るようにしてきたため、式を求めることはできた。(南小)
- C「変化と関係」の、道のり・時間・速さの関係について理解できている児童が多い。
授業の中で、繰り返し関係図を使うようにしてきたことが、ある程度定着したと思われる。(南小)
- 正答率は、どの設問も全国、県の正答率を上回るか、同等の正答率となっている。5つの設問においては、全国、県の平均よりも5ポイント以上高く、理解の定着が進んでいることが示唆される。(北小)
- △ C「変化と関係」の円グラフや棒グラフの問題では、正答率がかなり低い。グラフの目盛りを読み取れなかったり、計算を間違えたりしたことが考えられる。(南小)
- △ 長い文章や、複雑な表を読み取ることが苦手。(南小)
- △ 記述問題においては3問中2問が正答率を全国、県共に超えている。その中で、全国、県の正答率を下回ったのは、五角柱の面の数を書き、そのわけを底面と側面に着目して書く問題だった。立体の理解を見直し、補うべきところを補う必要がある。(北小)

～今後の対策～

- 国語と比較すると、思考・判断・表現の力が低め。「体積」「底面と側面」は、図形の定義や立体図形の構成要素などについて再確認する必要がある。(南小)。
- 加減乗除の基本問題をくり返し解き、基礎的な計算力を高める(南小)。
- 総合教育センターのクリア・チャレンジ問題を活用し、問題に慣れる(南小)。
- 無回答率は、国語に比べて低いことから、理解についても算数の方が高いことが示唆される。体積、速さ、グラフなど、無回答率の高い問題については学び直しを進め、中学での数学の学習が円滑に進むよう配慮したい。(北小)

【中学校】

① 国語科

- 「C 読むこと」の領域では、特に短歌において全国平均を大きく上回った。しかし、長文になると正答率が下がる。
- △ 「A 話すこと・聞くこと」の領域において、「インタビューの前に準備したメモについて説明したものとして適切なものを選択する」問いと、「相手の話を受けて発した質問について、述べ方の工夫とその意図を説明したものとして適切なものを選択する」問いの正答率がやや低かった。両方の設問に共通しているのは、「なんのための」メモや質問なのか、といった「目的や意図」を正しく読み取る力が問われていることである。

～今後の対策～

- 「A 話すこと・聞くこと」の領域の正答率が低い原因として考えられるのは、授業で「話すこと・聞くこと」に関する言語活動の経験が不足していることがあげられる。生徒自身がインタビュー活動の質問者となって、メモを作成することや、質問の答えに対してさらに問いを重ねることなど、双方型のやり取りの中で、力をつけていきたい。
- C 読むこと 特に長文については、様々な問題文や本を通して内容を読み取るについて深めていきたい。

② 数学科

領域別結果

	本 校	全 国	全国との比較
A 数と式	48.1	51.1	-3.0
B 図形	40.6	40.3	+0.3
C 関数	62.0	60.7	+1.3
D データの活用	55.1	55.5	-0.4

- ・「B 図形」「D データの活用」は全国平均正答率と有意な差はない。
- ・「A 数と式」は全国平均正答率を下回っている。
- ・「C 関数」は全国平均正答率を上回っている。

○ 「C 関数」

問題番号8(1)

二つのグラフにおけるy軸との交点について、事象に即して解釈することができるかどうかをみる。

問題番号8(2)

事象を数学的に解釈し、問題解決の方法を数学的に説明することができるかどうかをみる。

(1)は知識・技能、(2)は思考・判断・表現 をそれぞれ問う問題であった。問題場面設定は、ストーブの使用時間と灯油の残量という2つの数量関係について取り扱っているものであった。昨年度の授業では、お湯を沸かし始めてからの時間と温度の関係を表・式・グラフを用いて調べる活動を位置づけた。今後も、身の回りの事象を数学の眼で捉える活動を位置づける。

△ 「A 数と式」

問題番号1

連続する二つの偶数を、文字を用いた式で表すことができるかどうかをみる。

文字は数字の代表であること、連続するの意味をつかむこと、偶数の意味をつかむことを中心に学びなおしの場を位置づけたい。また、これらの基本的な知識について視覚教材を通じて理解していく活動も検討したい。

～今後の対策～

教科会として以下の2点について進めたい。

- 教科会内で各単元の教具教材の共有化をより一層進める。
- 「D データの活用」は近年重視されている領域である。この領域における指導時数を弾力的に調節することを通して、資質能力の育成をより一層進める。

(3)教科学習に対する興味・関心、規範意識・自己有用感、生活習慣・学習習慣に関する調査の結果の特徴的な事項について

注意:必ず「 」という問いでは、「 」という問いからなどを入れて、参考にした問いがわかるようにしてください。

【小学校】

・国語・算数・英語の勉強は、6年生児童のほとんどが大切だと思っている。また、国語・算数は社会に出てから役立つと全員感じている。ほとんどの児童が将来の夢や目標をもっており、今学んでいることが、自分の将来にもつながることを感じている。(南小)。

・自分にはよいところがあり、先生がよさを認めてくれていると感じている子が多い。また、人の役立つ人間になりたいし、困っている人を進んで助けることのできる6年生であることが分かる。そういったことから、友だち関係も満足でき生活の中でも幸せな気持ちにもなれるのではなかと考えられる。(南小)

・新聞を読んでいる子は1名のみ。新聞が手元にないこと、ネットで必要な情報は手に入れることができることなどが考えられる。また、携帯電話などを使ったゲームを普段からして、平日でも長時間使っている子が多めである。これらも含めて、全国学調のような長文を読んで解く問題には不慣れかもしれない。(南小)

・学んだことを生かしたり、課題の解決をしたりするときに、自分で考え自分から取り組める子どもたちが増えてきている。各教科の学びの中はもちろんのこと、学校生活の様々な場面(児童会活動・縦割り班活動など)でもその力が見られている(南小)。

・朝食を食べていない子どもたちが一定数いる。テレビゲーム・コンピューターゲーム・携帯電話を使ったゲームにおいては、極端に時間をかけている子どもと、全くやらない子どもに分かれている。日常の家庭生活が乱れているところがあると思われる子どもたちが一定数いることが示唆された。(北小)

・「先生はあなたのよいところを認めてくれている。」の質問紙では、そう思っていない子どもの割合が全国、県よりも下回った。職員の意識としてはよさを認めていると思っていても、子どもにそれが伝わっていないときがある。子どもに良さをどのように伝えるかについては、考えていく必要があるだろう。この質問紙の結果は、「困りごとや不安がある時に先生や学校にいる大人に相談できますか。」にも関連付いているかもしれない。(北小)

・「地域や社会をよくするために何かしてみたと思いますか？」という質問紙に、そうでないと答えた子どもたちの割合が多かった。白馬という地域について学び、これから地域とどう生きていくかを考えることができる子どもを育てるための授業の仕組み作りを考えていきたい。(北小)

・タブレット(ICT機器)を用いた授業がある程度しっかりできていることを子どもたちが自覚できている。しかし、国語や算数、理科や英語といった授業に対して必要感を感じていなかったり、学んだことを生活に生かしたりしてこうとする子どもたちの割合は少ない。授業のあり方については、今後も検討を進めなければならない。(北小)

【中学校】

・国語、数学において、「大切だと思う、将来役に立つと思うか」では、全国より下回っている。「なぜ学ぶのか」「学びがどのように将来役に立つのか」を取り扱う「まなびの集会」を全校で行うことにより、学ぶ意義を説明する、教科内で教員間の研修を積むなどしていきたい。

・「健康に過ごすために、学校で学んだことを普段の生活に役立てている。」

⇒ 学びが素直に実生活に生きている。

・教科の活動で、友と自分の考えを深めたり、話し合ったりする活動の割合が低い。

・道徳の授業で自分の考えを深めたり、話し合ったりする活動の割合が低い。

・学級生活をよりよくするための話し合い、互い意見のよさを生かして解決する活動が低い

・自己肯定感が低く、友達関係に満足していない傾向である。

⇒学級活動や各教科の授業での話し合い活動(協働の学び)の充実を図りたい。

⇒自分たちの生活環境をよりよくするためにルールをつくったり、見直したりする活動を行ってほしい。

3 学力向上に向けた全般的な傾向と今後の取組

【全 般】

➤ 小学校の算数・国語、中学校の数学・国語とも全国や長野県の正答率や中央値とほぼ同じであり分布も大きな変化は見られない。中学校の数学では昨年度と同じように正答数の二極化がみられ、標準偏差が若干大きい。特に記述式の問題に対しては正答率が低く、思考・判断・表現の評価は解答のプロセスを見ながらしていくことが大切だと思われる。

国語の問題では、話すこと・聞くことから言葉の特徴や使い方を理解できずにいる生徒、児童が増加し

ている傾向がある。算数・数学では短答式の計算や図形の知識・技能は正答率が高く、実生活の即した問題もデータを読み取りながら解答している。分布の結果や事象を数学的に証明して問題解決をはかることでさらに正答率を上げていきたい。

児童への質問では「学校へ行くのが楽しいですか」70%が当てはまる、どちらかという当てはまると答えているが、全国や県と比較すると10ポイント以上少ない。家庭学習時間は平日、休日とも全国や県よりも少ない傾向がみられる。生徒への質問では学級活動における自分の意見を言ったり、話し合いをしたりすることに積極的でなく、発表することも低い傾向がある。小中とも数学理科においてICT(タブレット)の活用が積極的に取り組まれている。当然のことながら、ゲーム時間が長い児童ほど正答率は低く、家庭学習時間が多いほど正答率が高い。今後、楽しい学校生活と積極的な学級活動への取り組みが課題となる。(南小)

- 小学校の算数・国語、中学校の数学・国語とも全国や長野県の正答率や中央値とほぼ同じであり、分布も大きな変化は見られない。中学校の数学では昨年度と同じように正答数の二極化がみられ、標準偏差が若干大きい。特に記述式の問題に対しては正答率が低く、思考・判断・表現の評価は解答のプロセスを見ながらしていくことが大切だと思われる。

国語の問題では、話すこと・聞くことから言葉の特徴や使い方を理解できずにいる生徒、児童が増加している傾向がある。算数・数学では短答式の計算や図形の知識・技能は正答率が高く、実生活の即した問題もデータを読み取りながら解答している。分布の結果や事象を数学的に証明して問題解決をはかることでさらに正答率を上げていきたい。

児童への質問では「学校へ行くのが楽しいですか」70%が当てはまる、どちらかという当てはまると答えているが、全国や県と比較すると10ポイント以上少ない。家庭学習時間は平日、休日とも全国や県よりも少ない傾向がみられる。生徒への質問では学級活動における自分の意見を言ったり、話し合いをしたりすることに積極的でなく、発表することも低い傾向がある。小中とも数学理科においてICT(タブレット)の活用が積極的に取り組まれている。当然のことながら、ゲーム時間が長い児童ほど正答率は低く、家庭学習時間が多いほど正答率が高い。今後、楽しい学校生活と積極的な学級活動への取り組みが課題となる。(北小)

- ①「まなびの集会」の開催
⇒各教科、「なぜこの教科を学ぶのか」「学んだことがどのように社会に出て役に立つのか」の趣旨を説明を「まなびの集会」を開き、説明したり、議論したりする場を設定していきたい。
②言語活動の充実
⇒話し合う、文章を書く、言語の関係を理解するなど言語活動のアウトプットする大切さを伝えたり、そのような場の設定をしていきたい。(中学)

【学校の取組】

(ア) 学校教育全ての中に対話活動を取り入れて、自分の考えや思いを伝え合える子どもたちを育成する(南小)。

(イ) 教師が、子どもたちの学びをつないで、子どもを主体とする学びを構築していく(南小)。

(ウ) 算数でもほかの教科でもそうだが、「何を聞かれているのか」を読み取る力が必要であるので、国語の力を上げていくような宿題であったり、ドリル的なものを行ったりしていくようにしたい(北小)。

(エ) 授業のワークシートなどで、ラーニングマップを取り入れていきたい(北小)。

(オ) 授業改善(中学)

①「協働の学び」の推進

⇒友と考えを広めたり、共有することにより、思考を深める活動をしくみたい。

② ICT 機器の充実

⇒校内にある液晶テレビ等の修理や有効な使い方の共有をすることにより、深い学びにつなげていく

③ ふりかえり活動の充実

⇒リフレクションを大切にすることにより、自分自身を客観視するメタ認知能力の育成を図る。

④ 個人探究できる時間の確保と地域との結びつき

⇒個人の興味関心のあることを追究する学習を設定することにより、キャリアの充実を図るとともに、村全体が学びのフィールドとして活用できるように連携を深める。

(カ) 授業におけるICT機器の活用(中学)

タブレットの使用頻度はかなり高い。しかし、「自分のペースで理解しながらの学習」「画像や動画、音声等を活用することで、学習内容がよく分かる」「自分の考えや意見を分かりやすく伝えることができる」「友達と考えを共有したり比べたりしやすくなる」「友達と協力しながら学習を進めることができる」がやや低いことから、ICT 支援員にタブレットや ICT の使い方についての可能性を広げる講義をお願いすることで、今後の ICT 使用の潜在的用法を探っていきたい。

【教育委員会の取組】

(ア) 各校の実情に応じた村費による講師(教育支援員)の配置。

(イ) ボランティアによる学習等支援の推進。

(ウ) 地域学校協働活動推進員を配置し、コミュニティ・スクール(地域の教育力を活かした学校教育)の充実。

(エ) 1人1台端末の更新を進め、GIGAスクール構想(教育ICT環境の充実を図り、教員や児童生徒の力を最大限に引き出すことを目指す取り組み)の推進。

(オ) 家庭学習を進めるヒント(家庭学習の充実で学力向上)として、内容をアップデートした「学習の手引き」を各家庭に配布。